

ゆく雲

樋口一葉

青空文庫

上

酒折さかをりの宮、山梨の岡、塩山えんざん、裂石さけいし、さし手ての名も都人こごびとの耳に聞きなれぬは、小
 ぼとけ 仏ささ子の難処なんじよを越して猿橋ざるはしのながれに眩めき、鶴瀬つるせ、駒飼こまかひ見るほどの里もなき
 に、勝沼かつぬまの町とても東京こことにての場末ぞかし、甲府はさすがに大厦高樓たいか、躑躅つづじが崎の城跡さき
 など見る処ところのありとは言へど、汽車の便りよき頃にならば知らず、こと更の馬車腕車くるまに一
 昼夜をゆられて、いざ恵林寺ゑりんじの桜見にといふ人はあるまじ、故郷ふるさとなればこそ年々としとしの夏
 休みにも、人は箱根伊香保いかほともよふし立つる中を、我れのみ一人あし曳びきの山の甲斐かひに峯みねの
 しら雲あとを消すことさりととは是非もなければ、今歳ことしこの度みやこを離れて八王子に足を
 むける事これまでに覚えなき愁つららさなり。
 養父清左衛門せいざゑもん、去歳こぞより何処どこ※処どこからだに申分ありて寐ねつ起きつとの由よしは聞きしが、常
 日頃すこやかの人なれば、さしての事はあるまじと医者いしやの指図さしずなどを申やりて、この身は
 雲井うゑいの鳥の羽がひ自由なる書生の境界けうがいに今しばしは遊ばるる心なりしを、先きの日故ふるさと
 郷とよりの便りに曰いはく、大旦那さまことその後の容躰ようたいさしたる事は御座ござなく候へ共、次

第に短氣のまさりて我意わがまつよく、これ一つは年の故せいには御座候はんけれど、随分あたり
の者御機げんの取りにくく、大心配おほを致すよし、私わたくしなど古狸ふるだぬきの身なればとかくつくる
ひて一日二日と過し候へ共、筋のなきわからずやを仰おほせいだされ、足もとから鳥の立つや
うにお急せきたてなざるには大閉口おほに候、この中ちゆうより頻しきりに貴君様あなたを御手もとへお呼び寄せな
さりたく、一日も早く家督相続あそばさせ、楽隠居なされたきおのぞみのよし、これ然しか
べき事と御親類一同の御決義、私は初手から貴君様を東京へお出し申すは氣に喰はぬほど
にて、申しては失礼なれどいささかの学問などどうでも宜よい事、赤尾あかその彦が息子のやうに
氣ちがひに成つて歸つたも見てをり候へば、もともと利発の貴君様にその氣づかひはある
まじきなれど、放蕩ほうたうものにもお成りなされては取返しがつき申さず、今の分にて嬢さ
まと御祝言ごしうげん、御家督引つぎ最もはや早きお歳としにはあるまじくと大賛成おほに候、さだめしさだ
めしその地には遊あそしかけの御用事も御座候はんそれ等を然るべく御取まとめ、飛鳥とぶとりもあ
とを濁にごごすな候へば、大藤おほふちの大尽だいじんが息子と聞きしに野沢のけいじの桂次けいじは了りようけん簡かんの清くな
い奴どこ、何処どこやらの割前わりまへを人に背負せよせて逃げをつたなどかふいふ噂うわさがあととに残らぬや
う、郵便為替ゆうびんがたにて証書面のとほりお送り申候へども、足りずば上杉さまにて御立かへを願
ひ、諸事清潔しよじきんじやくにして御帰りなざるべく、金故ゆゑに恥かぢをお搔かきなされては金庫の番をいたす

我等が申わけなく候、前申せし通り短氣の大旦那さま類に待ちこがれて大だれに御座候へば、その地の御片つけすみ次第、一日もはやくと申納候。六歳といふ通ひ番頭の筆にてこの様の迎ひ状いやとは言ひがたし。

家に生抜きはへぬの我れ実子にてもあらば、かかる迎へのよしや十度十五たび来たらんとも、おもひ立ちての修業なれば一ト廉かどの学問を研かぬほどは不孝の罪ゆるし給へともいひやりて、その我ままの徹らぬ事もあるまじきなれど、愁つらきは養子の身分と桂次はつくづく他人の自由を羨うらやみみて、これからの行く末をも鎖りにつながれたるやうに考へぬ。

七つのとしより実家の貧を救はれて、生れしままなれば素跣足の尻しりきり半纏ぼんでんに田圃たんぼへ弁当の持はこびなど、松のひでを燈火ともしびにかへて草鞋わらんじうちながら馬士歌まごうたでもうたふべかりし身を、目鼻だちの何処どこやらが水子みづこにて亡うせたる総領によく似たりとて、今はなき人なる地主の内儀つままに可愛かあいがられ、はじめはお大尽の旦那と尊たつとびし人を、父上と呼ぶやうに成りしはその身の幸福しやわせなれども、幸福しやわせならぬ事おのづからその中うちにもあり、お作さくといふ娘の桂次よりは六つの年少ともしたにて十七ばかりになる無地の田舎娘いなかものをば、どうでも妻にもたねば納まらず、国くにを出るまではさまで不運の縁とも思はざりしが、今日この頃は送りこしたる写真をさへ見るに物うく、これを妻に持ちて山梨ひがしこほりの東郡ちつぶくに蟄伏ちつぶくする身かと思へ

ば人のうらやむ造酒家つくりざかやの大身上おほしんしょうは物のかずならず、よしや家督をうけつぎてからが親類縁者の干渉きびしければ、我が思ふ事に一銭の融通も叶かなふまじく、いはば宝の蔵の番人にて終るべき身の、氣に入らぬ妻までとは弥々いよいよの重荷なり、うき世に義理といふ柵しがらみのなくば、蔵を持ぬしに返し長途の重荷を人にゆづりて、我れはこの東京を十年も二十年も今すこしも離れがたき思ひ、そは何故なにゆゑと問ふ人のあらば切りぬけ立派に言ひわけの口上もあらんなれど、つくろひなき正しょうの処ところこもとに唯一人ただすててかへる事のをしくをしく、別れては顔も見がたき後のちを思へば、今より胸の中もやくやとして自ら氣おのづかもふさぐべき種なり。

桂次が今をるここ許もとは養家の縁に引かれて伯父伯母といふ間なりがら也、はじめてこの家やへ来たりしは十八の春、田舎いなか縞かじまの着物に肩縫あげをかしと笑はれ、八やつ口くちをふさぎて大人の姿にこしらへられしより二十二の今日までに、下宿屋住居ずまゐを半分と見つもりても出入り三年はたしかに世話をうけ、伯父の勝かつよし義が性質の氣むづかしい処から、無敵にわけのわからぬ強情の加減、唯々女房にばかり手やはらかなる可笑をかしさも吞のみこ込めば、伯母なる人が口先ばかりの利口にて誰たれにつきても根からさつぱり親切氣のなき、我欲の目当てが明らかに見えねば笑ひかけた口もとまで結んで見せる現金の様子まで、度々の経験に大方は会え

得のつきて、この家やにあらんとには金づかひ奇麗に損をかけず、表むきは何処どこまでも田舎書生の厄介者が舞ひこみて御世話に相成るといふこしらへでなくては第一に伯母御前ごぜが御機嫌むづかし、上杉といふ苗字めうじをば宜いことにして大名の分家と利きかせる見得ぼうの上なし、下女には奥様といはせ、着物は裾すそのながいを引いて、用をすれば肩がはるといふ、三十円どりの会社員の妻がこの形けう粧そうにて繰廻しゆく家の中うちにおもへばこの女が小利口の才覚ひとつにて、良人おっとが箔はくの光つて見ゆるやら知らねども、失敬なは野沢桂次といふ見事立派の名前ある男を、かげに廻りては家の書生がと安々こなされて、御玄関番同様にいはれる事馬鹿らしきの頂上なれば、これのみにても寄りつかれぬ価値ねうちはたしかなるに、しかもこの家の立やはなれにくく、心わるきまま下宿屋あるきと思案をさだめても二週間と訪問おとづれを絶ちがたきはあやし。

十年ばかり前にうせたる先妻の腹にぬひと呼ばれて、今の奥様には継まなる娘こあり、桂次がはじめて見し時は十四か三か、唐人とうじん鬘まげに赤き切れかけて、姿はおさなびたれども母のちがふ子は何処やらをとなく見ゆるものと気の毒に思ひしは、我れも他人の手にて育ちし同情をばなり、何事も母親に気をかね、父にまで遠慮がちなれば自づから詞ことばかずも多からず、一目に見わたした処では柔和おしなしい温順すなほの娘といふばかり、格別利発ともはげし

いとも人は思ふまじ、父母そろひて家の内に籠りゐにても済むべき娘が、人目に立つほど才女など呼ばれるは大方お侠の飛びあがりの、甘やかされの我ままの、つつしみなき高慢より立つ名なるべく、物にはばかりの心ありて万ひかえ目にと気をつくれれば、十が七に見えて三分の損はあるものと桂次は故郷のお作が上まで思ひくらべて、いよいよおぬひが身のいたましく、伯母が高慢がほはつくづくと嫌やなれども、あの高慢にあの温順なる身にて事なく仕へんとする気苦労を思ひやれば、せめては傍近くに心ぞへをも為し、慰めにも為りてやりたしと、人知らば可笑かるべき自ほれも手伝ひて、おぬひの事といへば我が事のように喜びもし怒りもして過ぎ来つるを、見すて我れ今故郷にかへらば残れる身の心ぼそさいかばかりなるべき、あはれなるは継子の身分にして、俯甲斐ないものは養子の我れと、今更のやうに世の中のあぢきなきを思ひぬ。

中

まま母育ちとて誰れもいふ事なれど、あるが中にも女の子の大方すなほに生たつは稀なり、少し世間並除け物の緩い子は、底意地はつて馬鹿強情など人に嫌はるる事この上な

し、小利口なるは狡るき性根をやしなうて面かぶりの大變ものに成もあり、しやんとせし
 気性ありて人間の質の正直なるは、すね者の部類にまぎれてその身に取れば生涯の損お
 もふべし、上杉のおぬひと言ふ娘、桂次がのぼせるだけ容貌も十人なみ少しあがりて、
 よみ書き十露盤それは小学校にて学びしだけのことは出来て、我が名にちなめる針仕事は
 袴の仕立までわけなきよし、十歳ばかりの頃までは相応に悪戯もつよく、女にしてはと
 亡き母親に眉根を寄せさして、ほころびの小言も十分に聞きし物なり、今の母は父親が
 上役なりし人の隠し妻とやらお妾とやら、種々曰くのつきし難物のよしなれども、持ね
 ばならぬ義理ありて引うけしにや、それとも父が好みて申受しか、その辺たしかならねど
 勢力おさおさ女房天下と申やうな景色なれば、まま子たる身のおぬひがこの瀬に立ちて泣
 くは道理なり、もの言へば睨まれ、笑へば怒られ、氣を利かせれば小ぎかすと云ひ、ひか
 え目になれば鈍な子と叱かられる、二葉の新芽に雪霜のふりかかりて、これでも延びるか
 と押へるやうな仕方に、堪へて真直ぐに延びたつ事人間わざには叶ふまじ、泣いて泣いて
 泣き尽くして、訴へたいにも父の心は鉄のやうに冷えて、ぬる湯一杯たまはらん情もなき
 に、まして他人の誰れにか慨つべき、月の十日に母さまが御墓まゐりを谷中の寺に樂し
 みて、しきみ線香それぞれの供へ物もまだ終らぬに、母さま母さま私を引取つて下されと

石塔に抱きつきて遠慮なき熱涙、苔のしたにて聞かば石もゆるぐべし、井戸がはに手を掛て水をのぞきし事三四度に及びしが、つくづく思へば無情とても父様は真実のなるに、我れはかなく成りて宜からぬ名を人の耳に伝へれば、残れる耻は誰が上ならず、勿躰なき身の覚悟と心の中に詫言して、どうでも死なれぬ世に生中目を明きて過ぎんとすれば、人並のうい事つらい事、さりとはこの身に堪へがたし、一生五十年めくらに成りて終らば事なからんとそれよりは一筋に母様の御機嫌、父が氣に入るやう一切この身を無いものにして勤むれば家の内なみ風おこらずして、軒ばの松に鶴が来て巢をくひはせぬか、これを世間の目に何と見るらん、母御は世辞上手にて人を外らさぬ甘さあれば、身を無いものにして闇をたどる娘よりも、一枚あがりて、評判わるからぬやら。

お縫とてもまだ年わかなる身の桂次が親切はうれしからぬに非ず、親にすら捨てられたらんやうな我が如きものを、心にかけて可愛がりて下さるは辱けなき事と思へども、桂次が思ひやりに比べては遙かに落つきて冷やかなる物なり、おぬひさむ我れがいよいよ帰国したと成つたならば、あなたは何と思ふて下さろう、朝夕の手がはぶけて、厄介が減つて、楽になつたとお喜びなさろうか、それとも折ふしはあの話し好きの饒舌のさわがしい人が居なくなつたで、少しは淋しい位に思ひ出して下さろうか、まあ何と思ふてお出なさい

るとこんな事を問ひかけるに、仰しやるまでもなく、どんなに家中が淋しく成りましよう、東京にお出あそばしてさへ、一ト月も下宿に出て入らつしやる頃は日曜が待どほど、朝の戸を明けるとやがて御足おとが聞えはせぬかと存じまする物を、お国へお帰りになつては容易に御出京もあそばすまじければ、又どれほどの御別れに成りまするやら、それでも鉄道が通ふやうに成りましたら度々御出あそばして下さりませうか、そうならば嬉しけれどと言ふ、我れとても行きたくてゆく故郷でなければ、此処に居られる物なら帰るではなく、出て来られる都合ならば又今までのやうにお世話に成りに来まする、成るべくはちよつとたち帰りに直ぐも出京したきものと軽くいへば、それでもあなたは一家の御主人さまに成りて采配をおとりなさらずは叶ふまじ、今までのやうなお楽の御身分ではいらつしやらぬ筈と押へられて、されば誠に大難に逢ひたる身と思しめせ。

我が養家は大藤村の中萩原とて、見わたす限りは天目山、大菩薩峠の山々峰々垣をつくりて、西南にそびゆる白妙の富士の嶺は、をしみて面かげを示めさねども、冬の雪おろしは遠慮なく身をきる寒さ、魚といひては甲府まで五里の道を取りにやりて、やうやうの刺身が口に入る位、あなたは御存じなれどお親父さんに聞て見給へ、それは随分不便利にて不潔にて、東京より帰りたる夏分などは我まんのなりがたき事もあり、そ

んな処に我れは括られて、面白くもない仕事に追はれて、逢ひたい人には逢はれず、見た
い土地はふみ難く、兀々として月日を送らねばならぬかと思に、氣のふさぐも道理とせ
めては貴嬢でもあはれんでくれ給へ、可愛さうなものでは無きかと言ふに、あなたはさう
仰しやれど母などはお浦山しき御身分と申てをります。

何がこんな身分うら山しい事か、ここで我れが幸福といふを考へれば、帰国するに先
だちてお作が頓死するといふ様なことになれば、一人娘のことゆゑ父親おどろいて暫時
は家督沙汰やめになるべく、然るうちに少々なりともやかましき財産などの有れば、みす
みす他人なる我れに引わたす事をしくも成るべく、又は縁者の中なる欲ばりども唯にはあ
らで運動することたしかなり、その暁に何かいささか仕損なゐでもこしらゆれば我れは首
尾よく離縁になりて、一本立の野中の杉ともならば、それよりは我が自由にてその時に幸
福といふ詞を与へ給へと笑ふに、おぬひ惘れて貴君はその様の事正気で仰しやりますか、
平常はやさしい方と存じましたに、お作様に頓死しろとは陰ながらの嘘にしろあんまりで
ござります、お可愛想なことをと少し涙ぐんでお作をかばふに、それは貴嬢が当人を見ぬ
ゆゑ可愛想とも思ふか知らねど、お作よりは我れの方を憐れんでくれて宜い筈、目に見え
ぬ繩につながれて引かれてゆくやうな我れをば、あなたは眞の処何とも思ふてくれねば、

勝手にしろといふ風で我れの事とては少しも察してくれる様子が見えぬ、今も今居なくなつたら淋しかろうとお言ひなされたはほんの口先の世辞で、あんな者は早く出てゆけと箒はうきに塩花が落ちならんも知らず、いい気になつて御邪魔になつて、長居をして御世話さまに成つたは、申訳がありません、いやで成らぬ田舎へは帰らねばならず、情なさけのあらうと思ふ貴嬢がそのやうに見すてて下されば、いよいよ世の中は面白くないの頂上、勝手にやつて見ませうと態わざとすねて、むつと顔かほをして見せるに、野沢さんは本當にどうか遊あそぶしていらつしやる、何がお気に障りましたのとお縫はうつくしい眉しほに皺しわを寄せて心の解げしかねる躰ていに、それは勿論もちろん正氣の人の目からは氣ちがひと見える筈、自分ながら少し狂つていと思ふ位なれど、氣ちがひだとして種なしに間違ふ物でもなく、いろいろの事が畳まつて頭腦あたまの中がもつれてしまふから起る事、我れは氣違ひか熱病か知らねども正氣のあなたなどが到底とてどもおもひも寄らぬ事を考へて、人しれず泣きつ笑ひつ、何処やらの人が子供の時うつした写真だといふあどけないのを貰もらつて、それを明けくれに出して見て、面と向つては言はれぬ事を並べて見たり、机の引出しへ町ていねい嚙くにしまつて見たり、うわ言をいつたり夢を見たり、こんな事で一生を送れば人は定めし大白痴おほだわけと思ふなるべく、そのやうな馬鹿になつてまで思ふ心が通じず、なき縁ならば切せめては優しい詞でもかけて、成仏するやうにしてくれ

たら宜さそうの事を、しらぬ顔をして情ない事を言つて、お出いでがなくば淋しみしかろう位のお言葉は酷ひどいではなきか、正氣のあなたは何と思ふか知らぬが、狂きちがひ氣の身にして見ると随分氣づよいものと恨まれる、女といふものはもう少しやさしくても好い筈ではないかと立てつづけの一ト息に、おぬひは返事もしかねて、私わたしは何と申てよいやら、不器用なればお返事のしやうも分らず、唯々こころぼそく成りますとて身をちぢめて引退ひきしりぞくに、桂次拍子ぬけのしていよいよ頭の重たくなりぬ。

上杉の隣家となりは何宗かの御梵刹おんてらさまにて寺内じない広々と桃桜いろいろ植うわたしたれば、此方こなたの二階より見おろすに雲は棚曳たなびく天上界に似て、腰こしごろもの観音さま濡ぬれ仏にておはします御肩おんのあたり膝ひざのあたり、はらはらと花散りこぼれて前に供ともへし櫛しきみの枝につもれるもをかしく、下ゆく子守りが鉢巻おの上うへ、しばしやどかせ春のゆく衛ゑと舞まひくるもみゆ、かすむ夕ゆふべの朧おぼろ月つきよに人顔ほのぼのと暗く成りて、風少しそふ寺内の花をば去歳こぞも一昨おとし年もそのまへの年も、桂次此処おほかたに大方は宿を定めて、ぶらぶらあるきに立ならしたる処ところなれば、今歳この度とりわけて珍らしきさまにもあらぬを、今こん春はとも立かへり踏ふべき地ちにあらずと思ふに、ここの濡れ仏さまにも中々の名残をしまれて、夕ゆふげ終りての宵よひ々々家いを出いでては御寺参り殊勝に、観音さまには合掌を申て、我が恋人のゆく末を守りたまへと、

お志しのほどいつまでも消えねば宜いが。

下

我れのみ一人のぼせて耳鳴りやすべき桂次が熱ははげしけれども、おぬひと言ふもの木にて作られたるやうの人なれば、まづは上杉の家にやかましき沙汰もおこらず、大藤村にお作が夢ものどかなるべし、四月の十五日帰国に極まりて土産物など折柄日清の戦争画、大勝利の袋もの、ぱちん羽織の紐、白粉かんざし桜香の油、縁類広ければとりどりに香水、石鹼の気取りたるも買ふめり、おぬひは桂次が未来の妻にと贈りものの中へ薄藤色の襦袢の襟に白ぬきの牡丹花の形あるをやりけるに、これを眺めし時の桂次が顔、気の毒らしかりしと後にて下女の竹が申き。

桂次がもとへ送りこしたる写真はあれども、秘しがくしに取納めて人には見せぬか、それとも人しらぬ火鉢の灰になり終りしか、桂次ならぬもの知るによしなけれど、さる頃はがきにて処用と申こしたる文面は男の通りにて名書きも六歳の分なりしかど、手跡大分あがりて見よげに成りしと父親の自まんより、娘に書かせたる事論なしとここの内儀が人の

悪き目にて睨みぬ、手跡によりて人の顔つきを思ひやるは、名を聞いて人の善悪を判断するやうなもの、当代の能書に業平さまならぬもおはしますぞかし、されども心用ひ一つにて悪筆なりとも見よげのしたため方はあるべきと、達者めかして筋もなき走り書きに人よみがたき文字ならば詮なし、お作の手はいかなりしか知らねど、此処の内儀が目の前にうかびたる形は、横巾ひろく長つまりし顔に、目鼻だちはまづくもあるまじけれど、うすくして首筋くつきりとせず、胴よりは足の長い女とおぼゆると言ふ、すて筆ながく引いて見ともなかりしか可笑し、桂次は東京に見てさへ醜るい方では無いに、大藤村の光る君帰郷といふ事にならば、機場の女が白粉のぬりかた思はれると此処にての取沙汰、容貌のわるい妻を持つぐらゐ我慢もなる筈、水呑みの小作が子として一足飛のお大尽なればと、やがては実家をさへ洗はれて、人の口さがなし伯父伯母一つになつて嘲るやうな口調を、桂次が耳に入らぬこそよけれ、一人気の毒と思ふはお縫なり。

荷物は通運便にて先へたたせれば残るは身一つに軽々しき桂次、今日も明日もと友達のもとを馳せめぐりて何やらん用事はあるものなり、僅かなる人目の暇を求めてお縫が袂をひかえ、我れは君に厭はれて別るるなれども夢いささか恨む事をばなすまじ、君はおのづから君の本地ありてその島田をば丸曲にゆひかへる折のきたるべく、うつくしき乳房

を可愛かわゆき人に含まする時もあるべし、我れは唯だ君の身の幸しやわ福わせなれかし、すこやかなれ
 かしと祈りてこの長き世をば尽さんには随分とも親孝行にてあられよ、母御ははごぜ前の意地わる
 に逆らふやうの事は君として無きに相違なけれどもこれ第一に心がけ給へ、言ふことは多
 し、思ふことは多し、我れは世を終るまで君のもとへ文の便りをたたぎるべければ、君よ
 りも十通に一度の返事を与へ給へ、睡ねぶりがたき秋の夜は胸むねに抱いだいてまぼろしの面影をも見
 んど、このやうの数々を並らべて男なきに涙のこぼれるに、ふり仰あほ向ほいてはんけちに顔かほ
 拭ぬぐふさま、心よわげなれど誰たれもこんな物なるべし、今から帰るといふ故郷ふるさとの事養家の
 こと、我身の事お作の事みなから忘れて世はお縫ひとりやうに思はるるも闇なり、この
 時こんな場合にはかなき女心の引入られて、一生消えぬかなしき影を胸むねにきぎむ人もあり、
 岩木のやうなるお縫なれば何と思ひしかは知らねども、涙ほろほろこぼれて一ト言もなし。
 春の夜の夢のうき橋、と絶えする横ぐもの空に東京を思ひ立ちて、道よりもあれば新しんじ
 宿ゆくまでは腕車くるまがよしといふ、八王子までは汽車の中、をりればやがて馬車にゆられて、
 小仏こほとけの峠もほどなく越ゆれば、上野原うへのぼら、つる川のたじり、野田尻いぬめ、犬目とりざわ、鳥沢も過ぐれば猿
 はし近くにその夜は宿るべし、巴峽はきようのさけびは聞えぬまでも、笛吹川ふえふきがはの響きに夢むす
 び憂うく、これにも腸はらわたはたたるべき声あり、勝沼よりの端書一度とどきて四日目にぞ七里ななさと

の消印ある封状二つ、一つはお縫へ向けてこれは長かりし、桂次はかくて大藤村の人に成りぬ。

世にたのまれぬを男心といふ、それよ秋の空の夕日にはかに搔きくもりて、傘なき野道に横しぶきの難義さ、出あひし物はみなその様に申せどもこれみな時のはづみぞかし、波こえよとて末の松山ちぎれるもなく、男傾城ならぬ身の空涙こぼして何に成るべきや、昨日あはれと見しは昨日のあはれ、今日の我が身に為す業しげければ、忘るるとなしに忘れて一生は夢の如し、露の世といへばほろりとせしもの、はかないの上なしなり、思へば男は結髪いひなづけの妻ある身、いやとても応とても浮世の義理をおもひ断つほどのことこの人この身にして叶ふべしや、事なく高砂をうたひ納むれば、即ち新らしき一對の夫婦出来あがりて、やがては父とも言はるべき身なり、諸縁これより引かれて断ちがたき絆次第ほだしにふゆれば、一人一箇の野沢桂次ならず、運よくば万の身代十万に延して山梨県の多額納税と銘うたんも斗りがたけれど、契りし詞はあとの湊に残して、舟は流れに随がひ人は世に引かれて、遠ざかりゆく事千里、二千里、一万里、此処三十里の隔てなれども心かよはずは八重がすみ外山の峰をかくすに似たり、花ちりて青葉の頃までにお縫が手もとに文三通、こと細か成けるよし、五月雨軒ばに晴れまなく人恋しき折ふし、彼方よりも数々思ひ出の

詞ことばうれしく見つる、それも過ぎては月に一二度の便り、はじめは三四度も有りけるを後のちに
 は一度の月あるを恨みしが、秋蚕あきごしのはきたてとかいへるに懸りしより、二月に一度、三月
 に一度、今の間まに半年目、一年目、年始の状と暑中見舞の交つきあい際さいになりて、文もん言げんうるさ
 しとならば端書はかきにても事は足るべし、あはれ可笑をかしと軒のばの桜くる年も笑ふて、隣の寺の
 観音様御手おんてを膝ひざに柔和の御相ごそうこれも笑あはめるが如ごとく、若いさかりの熱あつといふ物にあはれみ給
 へば、此処なる冷やかのお縫ぬいも笑あはくぼを頬ほにうかべて世に立つ事はならぬか、相あかはらず
 父とと様の御機嫌ごきげん、母の気きをはかりて、我身わがみをない物にして上杉家の安穩やすんをはかりぬれど、
 ほころびが切れてはむづかし。

青空文庫情報

底本：「こぼりえ・たけくらべ」新潮文庫、新潮社

1949（昭和24）年6月30日発行

2003（平成15）年1月10日16刷改版

2008（平成20）年6月10日128刷

初出：「太陽」

1895（明治28）年5月号

※このファイルには、以下の青空文庫のテキストを、上記底本にそって修正し、組み入れました。

「ゆく雲」（入力：青空文庫、校正：米田進、小林繁雄）

※送りがな、振りがな、漢字の使い方の不統一は、底本通りです。

※底本巻末の編者による語注は省略しました。

入力：酔いどれ狸

校正：岡村和彦

2014年10月13日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

ゆく雲

樋口一葉

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>